

## “寛容”がキーワード？

弁護士 永井 弘二



この原稿を書いている5月時点で、“北”のミサイルに対する脅威がずいぶん取り上げられています。以前であれば、実際に使われることなどないと言い切れたとも思いますが、“北”、“米”のトップの個性に絡んで、一抹の不安も覚えるという感じでしょうか。英国のEU離脱、トランプ大統領による移民排斥、アメリカンファースト宣言、EUでの移民排斥の声の高まり等、保護主義的な動きが広がりつつあります。こうした動きの背景には2008年のリーマンショックにはじまる世界的な経済の低迷、移民問題、テロリズムの過激化などの要素があります。第2次大戦前には、1929年の株価暴落に始まる世界恐慌を受けたブロック経済等の保護主義的な動きやファシズムの台頭などがありました。現在の状況とどこか共通する印象を持つのは私だけではないように思います。

NHK BS1で、「欲望の民主主義～世界の景色が変わる時」という番組をやっていました。今年1月に放送された「欲望の資本主義（全11章）」の後続番組で、現在の保護主義的な動きに対する各界識者の見解を構成したものです。この中で、哲学者のマルクス・ガブリエルは「民主主義とは『反対派の共同体』です。異なる意見を意見として認められればあなたは民主主義者です。…他人や他の種の動物の苦しみを理解する人間の度量にかかっているのです。自分があの人だったかもしれないと認識すること、地中海でおぼれている女性や飢えている子どもは自分だったかもしれない、それが全ての倫理観の原点です。…科学、技術、信教の時代に私たちは生きています。もし民主主義の価値観が世界で崩壊したらかつてない規模の戦争を目撃することになります。民主主義を守る価値は確実にあるのです。今のところ、人間がみんなで生き残るための唯一の選択肢なのですから。」と述べています。政治学者のヤシャ・モンクは、「解決策は民主主義からの撤退ではなく、グローバリゼーションからの撤退でもありません。民主主義を再活性化し、グローバリゼーションによる衝撃を緩和する、そうした新しい政策を採択することです。グローバリゼーションが国内にもたらす影響に対応するのです。それが今やるべきことなのです。」と述べています。

もちろん、経済の活性化、保護主義的流れの打破とい

うのは、決して簡単なことではないでしょう。しかし、マルクス・ガブリエルが述べるような「人間の度量」、これを「寛容」と言い換えることもできると思います。そこに希望を見いだしたいと感じます（お前自身は「寛容」なのか、という批判はこの際後回しにします（笑））。

少し話がそれますが、NHK BS1で「失われた大隊を救出せよ～米国日系人部隊 英雄たちの真実～」という番組をやっていました（テレビばかりで恐縮ですが…（恥））。太平洋戦争の勃発に伴い米国日系人は収容所送りにされます。約1年後、日本の反米プロパガンダに対抗するために、ルーズベルト大統領は日系人の志願兵を募ることにします。日系人の中には強い反発もありましたが、若い日系人2世たちは、米国での日系人の地位を得るために志願してゆきます。欧州戦線では日系人で組織された442連隊がめざましい活躍をします。1944年10月、フランスブリュイェールを解放したところ、その東10kmで、米国141連隊（白人で構成された“テキサス大隊”約250名）が、独軍に包囲され身動きが取れず、風前の灯火状態となってしまいます。2つの連隊が救出に向かいますが、いずれも失敗し、日系人442連隊に救出作戦が命じられます。4日間にわたる壮絶な戦いの末、442連隊はテキサス大隊211名の救出に成功しますが、442連隊の死傷者は350名以上に及びました。442連隊は最も多くの勲章を受けた連隊で、米国では「英雄」とされています。しかし、442連隊に同道した従軍牧師ヒロ・ヒグチ氏は、この作戦について妻に送った手紙の中で次のように述べています。「果たして今回の戦争は意味があったのだろうか。一歩進むごとに泥とホコリと雪と地獄を垣間見る。我々の勝利は血にまみれていることを知って欲しい。おびたしい命が失われた戦争は、戦後よりよい世界を築かない限り意味がなくなってしまう。民族に関係なく、人間性のみが大切にされる世界を私たちが作っていかねばならないと思う。」

このヒロ・ヒグチ牧師の言葉は、現在になっても、否むしろ現在であるからこそ、光を放っていると感じるのは私だけでしょうか。